

VI

不登校対応研究グループ

「心の温度をあげるには ～不登校を未然に防止する取組～」

<研究員>

千里第一小学校	養護教諭	中尾 由美子
山田第三小学校	教 諭	小泉 絢子
青山台小学校	養護教諭	萩原 晶子
千里丘中学校	教 諭	小林 優
山田中学校	教 諭	福田 佑樹
教育センター	研究員	長田 純子

<スーパーバイザー>

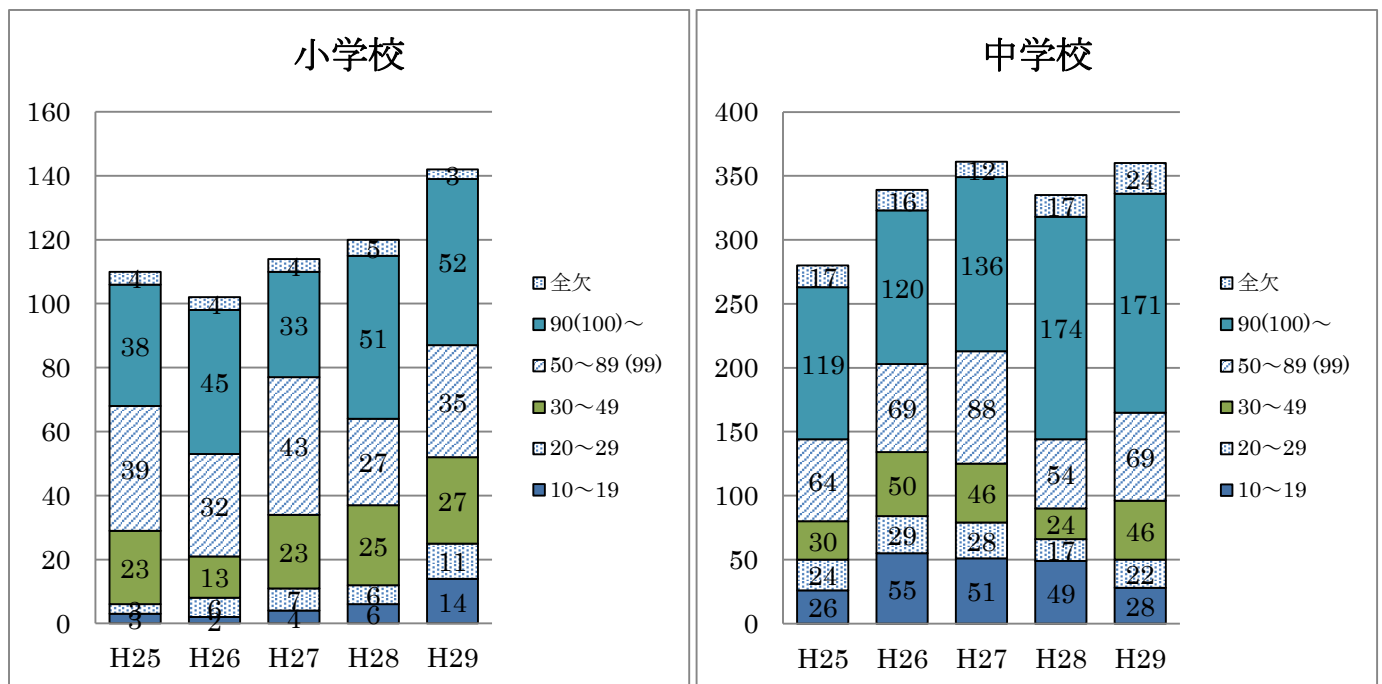
千里金蘭大学	教 授	黒瀬 哲也
--------	-----	-------

1. はじめに

「平成29年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（通知）」によると全国の公立小・中学校における不登校児童・生徒数は約14万人で前年から比べ、約1万人増加しており、同通知において国は「小・中学校の在籍児童・生徒数が減少しているにもかかわらず、不登校の児童・生徒数が5年連続で増加し、約6割の不登校児童・生徒数が90日以上欠席しているなど憂慮すべき状況である。」としています。また、大阪府においては、約1万人の児童・生徒が不登校で、前年から比べ約150人増加しています。

吹田市も国や大阪府同様の、現在約450人の児童・生徒が不登校で、小学校、中学校ともに前年に比べ20人強の増加しており、年度を追って比較しても（図1）、小学校、中学校ともに、特に小学校において増加傾向にあることが顕著に見て取れます。

（図1）過去5年間の欠席日数別児童生徒数の推移



また、全国・大阪府・吹田市の不登校児童・生徒の千人率（表1）を比較すると、児童・生徒千人あたりの不登校の割合が、吹田市は全国や大阪府に比べて高い状況であるだけでなく、前年からの増加を比較しても全国や大阪府以上に増えている現状が見て取れ、いずれのデータから、全国、大阪府、そして吹田市においても不登校対応は大きな課題であることは明らかです。

（表1）平成29年度不登校児童・生徒 千人率

（人）

	全国	大阪府	吹田市
小学校	5.5 (+0.7)	5.8 (+0.4)	6.8 (+0.9)
中学校	33.8 (+2.4)	36.7 (+1.0)	40.7 (+4.2)

2. 研究目的と概要

本研究グループはこれまで、深刻な不登校状態になった児童・生徒をいかに学校復帰につなげ、義務教育終了後の社会的な自立につなげるかに着目し、研究を行ってきました。例えば、平成29年度は「つながり」の欠如が不登校の要因の1つではないかという仮説の元、不登校児童・生徒の「つながり」を増やすことにより学校復帰につながり得るということの検証を行いました。

今年度は、前出の「平成29年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（通知）」において文部科学省は「不登校は、取り巻く環境によっては、どの児童生徒にも起こり得るものとして捉えること」としているとおり、どの児童・生徒にも起こり得ることを前提に、いかにそれを未然に防止するかに焦点を当てて研究を行うこととしました。

研究テーマに掲げている「心の温度」とは自尊感情や思いやり、コミュニケーション力につながるものです。この「心の温度」が高いと困難に直面しても対応でき、他者を思いやり、また他者に助けを求めることができる一方で、「心の温度」が低いと暴言や暴力、自傷行為、引きこもりにつながり、「心の温度」の低さが不登校の要因のひとつになっているのではないかと考えました。

従って、不登校を未然に防止するためには、児童・生徒個々の「心の温度」を上げる必要があり、学校で教職員が総合や道徳、行事等の日々の取り組みの中で行えるような方法を提案することを本年度の研究目的としました。

3. 活動経過等について

平成30年 5月25日（金）今度の方針検討

平成30年 7月25日（水）今度の方針検討・確認

（S V参加・助言）

平成30年 8月22日（水）S Vによる取組案提示・実演

（S V参加・助言）

平成30年 9月27日（木）各研究員より取組事例発表

（S V参加・助言）

平成30年10月29日（月）各研究員より取組事例発表

平成30年11月12日（月）教育研究報告会の内容精査1

平成30年12月19日（水）教育研究報告会の内容精査2

（S V参加・助言）

平成31年 1月23日（水）教育研究報告会の内容精査3

平成31年 1月30日（水）教育研究報告会 発表

平成31年 3月19日（火）「心の温度を測る尺度の検討と効果検証」

（S V参加・助言）

4. 心の温度をあげる取組の検討

(1) メッセージノート

教室に入りにくい児童・生徒の居場所のひとつとして機能することが多い、保健室での取組です。「悪口を書かない」「乱暴に扱わない」「ふわふわ言葉をつかう」「秘密を守る」「からかわない」というルールのもと、来室時に誰でも記入できるノートを置き、自由に思いを綴れるようにしました。実施した養護教諭からは「時には教師のコメントも添えますが、あくまで指導ではなく、つぶやく形で返す。コミュニケーションツールとしては、どのような状態の子供にでも有効であると感じます。」との報告がありました。

(2) リフレーミングカード

自分の性格をネガティブにとらえている児童に対して、こういう考え方もあるよ、とリフレーミングの手法を使い、伝えます。例えば「はっきり嫌と言えない⇒優しくて、相手の気持ちを考えることができるんだね。」や「言い方がきついつて言われた⇒自分の考えがはっきりしているってことだよ。」などのように、自分に対する認識に違った視点を持たせてあげることにより、自己肯定感を高めることにつながったとの報告がありました。

(3) ゴールデンカード

自己肯定感や自己有用感を育てること、教員と児童・生徒の人間関係を育てることを目的とした取組で、日常の学校生活の中で、児童・生徒が、他の児童・生徒の「光った部分」をメモ(図2)して担任に手渡します。実施者より「普段スポットが当たりにくい子供にスポットが当たる」「大人しい子供、目立たない子供が突然、理由がわからず不登校になることを未然に防げた」などの報告がありました。

ゴールデンカード

() 先生へ

() 年 () 組 名前 ()

() より

図2 ゴールデンカード

(4) わたしたちのお店屋さん

学校生活の基盤となる学級で自分の意見を率直に言え、他の児童・生徒の意見も素直に受け入れられる集団づくりを行い、個々の自尊感情を高めるために、構成的グループエンカウンター「わたしたちのお店屋さん」を市内中学校1学級にて実施しました。

情報が書かれたカード(図3を切ったもの)を6～7名の班員それぞれに数枚配布し、自分

私たちのお店屋さん情報カード

1. 花屋の側に病院があります。	2. ガンランスタンドのとなりに釣魚屋があります。	13. おもちゃ屋の前が、釣魚屋です。	14. 肉屋の側に、魚屋があります。
3. 郵便局は、四角い建物です。	4. スーパーマーケットとそば屋は、四角い建物です。	15. 郵便局の側に、肉屋があります。	16. 肉屋は、お店のならびの端にあります。
5. 病院とガンランスタンドの間には、喫茶店があります。	6. スーパーマーケットのとなりに、八百屋があります。	17. 八百屋は、真ん中にあります。	18. 喫茶店と釣魚屋の間にはガンランスタンドがあります。
7. 八百屋の前は、本屋です。	8. 喫茶店と魚屋の間には、病院などがあります。	19. スーパーマーケットに向かって右側には、そば屋、おもちゃ屋が並んでいます。	20. 横断歩道の前には、花屋があります。
9. 郵便局の前は、肉屋と花屋です。	10. 喫茶店の前がスーパーマーケットです。		
11. 八百屋のとなりに花屋があります。	12. そば屋の前におもちゃ屋があります。		

図3 配布ヒントカード

のカードを他人に見せることなく、班員とコミュニケーションを取りながら、他の班員と協力し、基本台紙（図4）に店の位置を記入（図5）していきます。生徒の振り返りにおいて「仲間と協力して問題を解いて、普段一緒に話をしない人ともコミュニケーションを取れて、仲が深まりました。一人一人の意見を出し合えて良かったです。」や「人の意見を聞くことは難しいと思った」などの感想がありました。授業者は「協力の大切さを感じたようである。一人一人のヒントが重要なので、個人の意見が認められやすく、自己有用感、自己肯定感が高まったようだ」と報告していました。

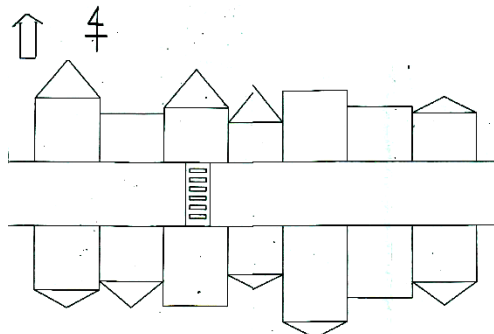


図4 基本台帳（記入前）

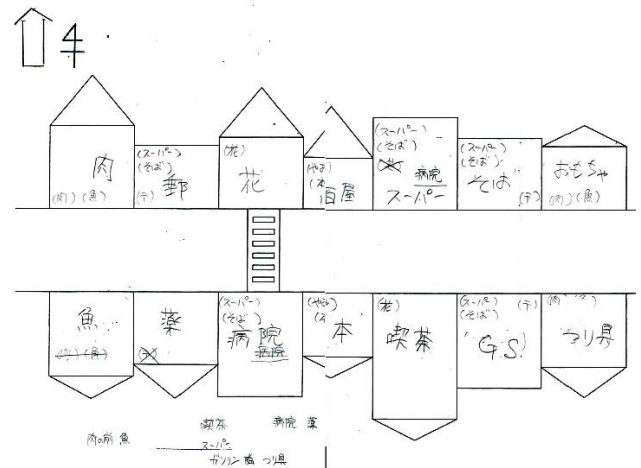


図5 基本台帳（記入後）

（5）千里キャンドルロードへの参加

千里を「ふるさと」と感じられる、参加型のお祭りをということで、平成24年（2012年）からスタートしたイベントに、吹田市適応指導教室「光の森」活動として参加しました。運営にあたるボランティアスタッフから説明を受け、ろうそくを入れてキャンドルとなる紙コップに絵付けをしていきました（写真1・2）。「今まで「光の森」活動に参加しにくかった生徒が参加できるようになり、目的に向かって一緒に作業するという体験が、心の温度をあげることに繋がった」と実施者は報告していました。



写真1 キャンドルロード取組



写真2 キャンドルロード当日



(3) 様々な「心の温度をあげる取組」を検討しての感想

ア 「光の森」活動において千里キャンドルロード」に参加し、子供たちとともにキャンドルづくりができたことは、大変良い経験になりました。活動の中でお互いの作品を褒め合い、作品を見て会話が広がる様子は、こちらの心の温度も上がりました。「学びの森」活動の中でもキャンドルづくりを多くの児童・生徒が自分から手伝ってくれたことが、とても嬉しく、たくさんの優しさをもらいました。今後、適応指導教室の子供たちも含め、多くの児童・生徒の心の温度を上げる取組を考えていきたいと思います。

長田 研究員

イ 「不登校」「いじめ」「自殺」などの問題を抱えている現代の教育界においては、子供の自尊感情や自己有用感を育てていくことが必要です。今回の研究グループでの活動により、子供が「自分自身を肯定的に認めていけるようになる」「他者から必要な存在として大切にされている」と感じることができるようになる効果的な取組が、様々なことを学ぶことができました。今後、それを可視化していくことで、その効果が実感していけるようになるだろうと思います。

福田 研究員

ウ 心の温度を上げる取り組みの一例として「わたしたちのお店屋さん（構成的グループエンカウンター）」を教室で実践できたのが非常に良かったです。普段とは違った視点で生徒たちの活動を観察することで、一人一人の良さや特徴を見ることができました。さらに、生徒たち自身が活動を通じて感じたであろう自己有用感がその後の教室での生活に生かされたように感じています。

お互いを認め合うことの大切さを生徒たちの間にどう育んでいくかは大きな課題だと思いますが、こういった取組ならば楽しみながら進めていけるのではないかと感じました。今後も研究グループで紹介された取組を実践していきたいと思います。

小林 研究員

エ 心の温度をあげるというねらいを教師側が持っているかどうかで、いろいろな取り組みから得られる効果が違ってくると思う。不登校にかぎらず様々な問題に対して、心の温度という観点を持っていれば、手だてや問題の捉え方が変わってくると思う。少しでも未然に防げるような取り組みをしていきたい。

小泉 研究員

オ 保健室には自尊感情が低く、コミュニケーション能力が低い、いわゆる心の温度が低い児童が日々来室します。今年度、心の温度をあげる取組として学んだ、構成的グループエンカウンターや各校の取組を、今後の児童対応に役立てていきたいと思います。次年度は、その取組が有効かどうか、既存の尺度を使った検証を行い、さらに研究を深めていきたいと思います。

中尾 研究員

カ グループワークで話し合ったり協力したりする時間を持ったり、ただ並んで同じ作業をする時間を持つだけでも、子供たちの心の温度があがっているのが感じられました。SNSの普及など社会情勢の中で、人と人とのつながりは一方的で希薄なものになってきているのかもしれない。心の温度をあげるためには、子供同士をつなぐ『場の設定』が必要で、今後ますます必要になってくると思われます。

萩原 研究員

5. さいごに

心の温度をあげる取組として、今年度いくつかの取組例を収集し検討しました。今回紹介した「わたしのお店屋さん」や「千里キャンドルロードへの参加」など、日常の取組とは異なるものもあったが、基本的に心の温度をあげる取組とは、何か特別な取組をすることではなく、教職員が日常の学校生活において既に行っている取組だと考えます。すなわち、取組を行う上で、教職員が「心の温度をあげる・自尊感情を育む」という明確な目的意識を持ち、取り組む上での説明や教示を行うことにより、子供の動機に違いが生まれるのではないかと思います。従って、今年度検討したような取組事例を研究するとともに、取り組む際に教職員がどのような点に留意すべきかを取りまとめることも研究すべき内容の1つであると考えます。

次年度は、それに加えて、「心の温度をあげる取組」を実施した前後で、子供の自尊感情にどのような変化をもたらすのか、既存の尺度（例えば自尊感情測定尺度（東京都版））を用いて縦断的に調査することを検討しています。

本研究は、不登校児童・生徒の千人率が全国や大阪府に比べて、高い状況にあるばかりか、昨年度より状況が悪化している本市において、各学校における日常的な授業や各取組等において、本研究にもあるような「心の温度をあげる取組」が行われることにより、子供の自尊感情や自己有用感が高まり、不登校を未然に防止することにつながることを期待します。